

「日本語表現法」授業の方法論 —パブリックスピーキングの観点から—

高木香与呼

1 はじめに

筆者は中日本自動車短期大学で「日本語表現法」（以下“表現法”とする）開設時（2008年度）より担当する機会を得た。この4年間、実務家教員として、話す日本語（以下“話語”とする）に特に焦点を当てて教えてきた。本稿では、一般的な大学の状況及び本学での「表現法」の講義の主眼点について論ずる。特に本学での教育実践をとおしてパブリックスピーキング教育や書く日本語（以下“書語”とする）と話語の違いに対する教育について述べる。

2 一般的な大学の日本語表現法

1990年代初めから、大学生の国語運用力の低下が問題となり、一部の大学で「表現法」などと題する科目が、初年次に大学の講義を受ける上での日本語の基本的スキル教育として開設され始めた。大学では以前の教育と違い、授業の中でレポート・発表などが多く求められる。そのため自分の意見を論理的に説明するための国語力、即ち語彙力・思考力・伝達力等が必須となる。

1990年代末には、大学のユニバーサル化（18歳人口の半数が大学入学）が進行し、学生の日本語レベルはさらに深刻な問題になった。そのため大学で必要となる日本語を再教育する必要性が高まり、多くの大学でこの種の講義が開講されることとなった。

指導内容は概ね文章力に関するもので、論理的な構成で説得力のある文章作成に重点が置かれた。

3 本学での日本語表現法

3-1 はじまり

本学では2008年度より初年次の必須科目として開設された。本学は自動車整備士の国家資格取得を主たる学習目的とする大学であるが、整備士が技術職としてだけでなく、整備に関する顧客の要求を聞き、受け入れ、結果をわかるように説明するという接客のスキルも要求され始めた時代背景がある。説明などの対応業務は国家試験の内容にも含まれるようになり、また、会社内での人間関係がスムーズに行えることという求人要求が高まってきた。よって日本語の基礎力・運用力を向上させるべく開講した。

3-2 本校学生の特徴

本学学生は車好きはもちろんのこと、どちらかというと言葉よりも行動や結果を重視する傾向が強い。また、黙々と車と向き合うことが好きな学生も多くみられ、座学の勉強は苦手な学生が多い傾向にある。当然日本語には苦手意識が強く、今更勉強しても無駄だと決めつけている傾向が強い。

高校までの教育の結果、作文を書かせると一見論理的な文章が書けるが、意図的・主体的なものではなく、高校までに書いてきた作文の延長が多い。

内容の中心になる意見についても、何かで読んだり見たりしたもので、自分の意見を書いたものではないことがしばしばである。これは、これまで自分の意見を素直に述べる機会もなく、文章にすると評価対象にならなかったのではないと思われる。

つまり、文章技術の基礎はできているものの自信は持っておらず、かつ書いたとしても借り物の意見であり自分の言葉で意見を述べることはできない。借り物の意見であるため語彙も貧弱となり、説得力のある結論に導くことができないのである。

語彙・ことわざなどについての関心や興味は、TV・本等の日本語ブームの影響も若干あるものの、自発的に学び求めることはしない。語彙のほとんどはこれまでの学生生活、人間関係から得られるものやテレビなどの影響が強い傾向がある。ただ、漢検の影響もあり古い漢字や難読漢字の読みに精通した者が稀にいるが国語力向上の目的ではなく、パズルを解くゲーム感覚から覚えたようだ。

学生は新鮮な情報には興味を示すが、既知情報には関心を示さない傾向がある。

4 本学での日本語表現法の実践内容

4-1 2008年度～2009年度

オムニバス形式で4人の講師が15回を担当したクラスと、一人の講師が15回を担当したクラスとがあった。内容は講師によってアプローチは違うが日本語力涵養であった。

筆者は初年度、その半分近くを話すこと—パブリックスピーキング（人前で話しかた）に費やした。理論を説明し実践を繰り返すものである。具体的な話し方に関する項目は、①自分の名前を伝えるように言う、②印象的な自己紹介、③いい印象を与える態度、④取材で自分を知る、⑤他己紹介（相手を褒める）、⑥ラジオのDJになってみよう、⑦ディベート、を行った。書語と話語を特に意識するための項目は⑥・⑦である。

①・②・③の自分自身で行うものは、いままでしてきたことでもあるため、自分の名前をゆつくり言うなどの注意点が目新しいのか、半分程度の学生は或る程度前向きに挑戦していた。

しかし、④・⑤のような他者とかかわらねばならない項目になると、興味はあるもののまだ高校を卒業したばかりの男子には、羞恥心と縄張り意識からかいつもの仲間とのなれ合いの構図が前面に出てしまい、真面目に取り組むものは1クラス40人前後の中で3～4人になってしまうと

いう問題が残った。特に④に関しては、内容はインタビューなのだが学生は「取材」という言葉にひかれ最初は新鮮味を感じたようだ。しかし、なれ合いの構図にのみこまれてトーンダウンしてしまった学生が多く、改善しなければならない。

⑥に関しては個人的な作業で、熟知していることについてでなければできない。短時間で十分に作成させるために題材は自由とした。しかし、題材選びに考え込んでしまう学生が多く、発表までこぎつけた学生はほんの2～3人だった。次学期は4～5人のグループ学習にしたが、あまり変化はなかった。

⑦は「議論」にけんかのイメージを持つものが多く、また、数回の講義では自分の意見をわかりやすく他者に伝えることに至らず、関極的に参加する2～3人のみの独壇場になってしまい全く機能しなかった。

半期後のアンケートでは、このような教育はほとんど受けたことがなかったため、勉強になったという意見がいくつか見られた。(参考資料)しかし、積極的に取り組まない学生にとっては得るものが少なく、国語の基礎力アップには不十分な結果となった。積極的に取り組まない学生は、学習の目的が理解できなかったものと思われる。

4-2 2010年度～2011年度

クラス数に変化があり、この年度から1学期を2人で担当することとした。一般に必要なだと考えられるパブリックスピーキングの基本と書語と話語の違いの理解には、7～8回の講義でもできることがわかったからである。これで、筆者は初年次のすべてのクラスを担当できるようになった。

内容は前年度までであまり成果を得られないものを削り、個人的な①、③の項目のみに絞った。また、②はあらゆる場面で何度も経験してきたため完成度は低くとも興味度が低すぎるので説明のみとした。

⑤は活動自体は積極的ではないものの、授業後に多方面で活発な感想が得られたため残した。入学後まもなく、他者とかわることの楽しさと難しさを、実感し考えるきっかけとなっている旨の感想が多く得られている。

残りの時間は、環語と書語の違いを考慮しながら文章作成の技術についておこなった。興味を失わせないために、字己PRや面接での応答、技術の説明を例にした。一般的な題目よりもより実践に即した題目にすることで意欲になる学生が多く見られた。

また、これまでほとんど社会人としての生活をしてこなかった学生は、既に学習してはいるものの、敬語に全く自信がない。毎回何らかの形で、一般的な敬語からビジネス敬語、そして、面接時の敬語にいたるまで、視点を変えて敬語トレーニングを実施した。敬語に関しては、毎回皆熱心に取り組んでいた。

5 パブリックスピーキング

筆者の考えるパブリックスピーキングに必要な一般的スキルは、「態度」「話速」「発音」「発声」「話語」である。前提条件として、当たり前だが「内容理解」がある。

特に「態度」は印象の大部分を占めるため重要である。その次に重要なのは「話速」。それ以外ももちろん重要なのだが、それは「態度」と「話速」ができてからの問題である。

以上の要素を知識としては教えたが、十分に定着したとは言えない。話し方は、一度覚えても生来の癖に戻ってしまうのが常であるため、ポイントを会得したのち何回かの発表を通して定着させることが望ましい。

また、言葉選びも話語と書語では変えることが必要である。具体的には、語彙選びと語順、文章の長さの特徴がある。その点は毎回繰り返し指導したため、観念的な植え付けには成功したと思われる。

6 今後の課題

時代の趨勢もあつてのことだが、同じカリキュラムでもクラス人数によって習得度に差が出てしまった。クラス人数に関係なく全員がある程度パブリックスピーキングを習得できる方法は今後も探っていきたい。そして、女子学生とは性質の異なる男子学生の人前での羞恥心を克服する方法を検討し確立する必要性がある。

また、パブリックスピーキングでは理論を理解していても実行できることは全く違う。理論だけではなく、その後の実行までを確認できる方法も必須になるであろう。

次年度に向けて話語としての日本語を中心に論を組み立て、確立したカリキュラムを作成中である。

参 考 資 料

2008年度「日本語表現法」講義終了後アンケート結果（通年30回講義 一クラス39名）

※下線部がアンケート結果内容（原文に忠実）

1. この講義は役に立ちましたか？

役立った 20 どちらでもない 11 役立たない 2

2. 1で「役立った」と答えた人は役立った内容を教えてください

- ・ スピーチ力や発表するとき、人をひきつける力などが学べた気がする。
- ・ 仕事のときに役に立つと思った
- ・ 人とのコミュニケーションなどでとても使える授業などがあつた。
- ・ 人前でしっかり喋れるようになった。

- ・やらないよりはましです。
- ・話すことの大切さとマナーを学べたから
- ・話し方について勉強になった
- ・これから先に使える
- ・みんなの前で話すときに少し困らなくなった
- ・喋り方
- ・企業の面接のときに役立った。言葉遣いとか・・・。
- ・自己紹介や他己紹介、話し方や雰囲気について
- ・前は人前に立つのがいやだったけど、今はだいぶなれて前に立って話せるようになった
- ・就職試験の面接でも緊張せずいられた
- ・意図が良く表現されている。日常生活の中でと就職するとき、きれいな言葉を使う、正確な表現自信になった（留学生）
- ・面接
- ・特に就活にいい対策になった（全体的に）
- ・人前に出て話すと言うことに慣れることができた。
- ・バイトなどでいろいろな表現ができた。

3. 1で「役立たなかった」と答えた人は、その理由を教えてください。

- ・なんとなく
- ・なんとなく

4. この講義では、主に話し方に重点を置きましたが、その他に日本語表現法で習得したいと思うものは以下のどれですか？（複数回答可）

日本語文法 ② 文章表現 ⑦ 作文の書き方 ④ 文学 0 ことわざ ③ 四字熟語 ② 短歌 ② 会話力 ⑬ スピーチ ⑤ 自己紹介 ⑤ 論文の書き方 ⑤ 報告書の書き方 ⑥ 自己PRの書き方 ⑦ 司会の仕方 ① 敬語の使い方 ⑨
その他 ②
・漢字 ・全部やった気がする

5. その他、何か今後の授業改善についてのご意見などあればお願いいたします。

- ・何のためにやっているかがわかればよいと思った
- ・発音練習
- ・特にないです

- ・ 入社試験対策の授業をしてほしかった
- ・ グループで何かもっとやればよかった。
- ・ 授業がカッコイイ気がするので、もう少し余裕があるといいです
- ・ いつも書物の上での知識を勉強する。書物以外の知識は、先生教えてください。例えば、日本の歌舞伎や茶道や生け花などの知識発表する、面白いと思います。
- ・ 宿題が多くてたいへん。就活やテスト勉強と重なるとつらいです
- ・ 宿題が多いので減らしたほうがいいと思う
- ・ もっといろんな人、幅広く交流できればよかった。
- ・ 宿題の頻度が多いように感じました。就活のときやテストのときなどは、どうしても後回しになってしまうことが多いので、効率的ではないかもしれないので、時期を調整するといいかもありません。すべて効率よく話したいです。

参 考 文 献

- 筒井洋一, 導入教育における日本語表現法教育の重要性について, FD研修会報告, 2005
筒井洋一, 大学が求める言語表現教育とは?, 高大連携フォーラム第一分科会報告, 2004
大場理恵子・中村恵子, アカデミック教育とキャリア教育を融合した日本語表現法授業の実践例—アカデミック教育とキャリア教育に共通する基礎力の涵養をめざして—, アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル2, 2010
佐藤誠, 日本語表現法—就職に役立つ話し方の技術—, 北樹出版, 2008
大澤肇, ビジネススピーキング, NHK出版, 2000